

「どちらかじゃない、ラベンダー」

—初稿—

2025/06/07

しののめ ののの

〈人物表〉

真中^{まなか}はじめ

(28)
会社員

三浦沙織

(28)
学生時代の同期

三浦一輝

(28)
学生時代の同期

1. 真中家・はじめの部屋（夜）

真中はじめ（28）、消灯した自室で鼻歌混じりにノートPCを触っている。

PCにはゲーム動画の編集画面。

一応女性だが、中性的で性別が分かりづらい外見。不意に、手元のスマホから通知音が鳴る。

はじめ、手を止めてスマホを確認。

眉をひそめ、少し逡巡してから電話をかける。

はじめ「……もしも？ 久しぶり。え、どゆこと？」

電話の向こうから三浦沙織（28）の声。

何かを喋っている。

はじめ「……え？ マジで言ってる？ 動画？」

はじめ、思わずPCの動画編集画面を見る。

はじめ「いやあ……いや、最近は全然作ってなくて……えっちょっと、待っ……」

はじめ、切られたスマホを見つめる。

はじめ「ええ……」

机の隅に置かれた写真立てに目をやる。

はじめ、沙織、三浦一輝（28）が笑顔で写っている。真ん中に、はじめの姿。

はじめ、ため息をついて頭を抱える。

2. 結婚式場・外観（昼）

陽光に照らされた、一般的な結婚式場。

はじめ、小綺麗なパンツスタイルで式場を見上げている。眩しそうに顔をしかめている。

3. 結婚式場・打合せ室（昼）

はじめ、沙織、一輝、式場スタッフが、テーブルを囲んで打合せをしている。

スタッフ「……という感じで、当日はよろしくお願いいたします」

沙織・一輝「お願いします」

スタッフ「それで……こちらの方が、お二人のプロフィール映像を？」

スタッフ、はじめを見る。

はじめ「あ、いや、まだ引き受けた訳では……」

沙織「えー？ まだそんなこと言ってるの？」

一輝「ここまで来といて？」

はじめ「いやまあ……一応、話は聞こうと思って……」

沙織「私、はじめちゃんの動画大好きだったんだよ」

スタッフ「何かされてたんですか？」

沙織「そうなんです。学生時代に映像研究会で」

スタッフ「そうでしたか。であれば、まさに適任ですね」

はじめ「いやでも、趣味程度ですし……」

一輝「とか言いつつ考えてくれてんだろ？ 構成」

スタッフ「これから衣装の確認等も行いますので、撮影したいものがありません非」

はじめ「はあ……」

一輝「とりあえず素材撮ってしてくれよ。そう何度も来れないし」

はじめ「うーん……わかった……」

4. 結婚式場・衣装室（昼）

はじめ、衣装を確認する沙織と一輝の姿を、ハンデイカメラに収めている。

二人は楽しげだが、はじめは複雑そうな表情。

5. 結婚式場・屋外（昼）

はじめ、笑顔で寄り添う沙織と一輝の姿を、ハンデイカメラに収めている。

6. 結婚式場・外廊下（昼）

はじめ、手持ち無沙汰気味に外の景色や、廊下に飾られた花などを撮っている。

遠くから二人の笑い声が聞こえている。

青とピンクのラベンダーが生けられた花瓶に、ハエがたかっている。

はじめ、険しい顔でハエを見つめ、手で追い払う。

7.

結婚式場・中庭（昼）

はじめが適当にカメラを回していると、沙織がやって来る。

沙織 「どんな感じ？」

はじめ 「まあ一応……ある程度は撮れたかな」

沙織 「……無理言ってごめんね」

はじめ 「いや、まあ……」

沙織 「……ほんとに嫌だったら、やめても良いから」

はじめ 「え？」

沙織 「その……こんなタイミングで、こんなこと聞いているのか分かんないけど……はじめちゃんてさあ……」

× × ×

はじめと沙織が何かを話している引きの画。

はじめ、顔の前で手を振って何かを否定している。

沙織、ほっとしたように笑う。

はじめの腕のあたりを軽くたたき、その場を離れる。
はじめ、沙織が去った先を見つめ、立ち尽くしている。

8.

真中家・はじめの部屋（夜）

消灯したはじめの自室で、PCにプロフィール映像の編集画面が映っている。

昼間に撮った二人の映像素材が流れている。

幸せそうな様子の二人。

不意に映像が一時停止させられる。

画面を見つめるはじめ、泣いている。

手元には絵コンテのようなものが描かれた紙や文具。
三人の写真が入った写真立ては伏せられている。

9.

カフェ・外観（昼）

一般的なカフェ。

10. カフェ・内観(昼)

はじめと一輝、向かい合って座っている。
テーブルには二人分のコーヒー。

はじめ「……ごめん」

一輝「そっかあ……」

一輝、困ったように息をつく。

一輝「……理由は？」

はじめ「……まあ色々……忙しくて……」

一輝「……まあ、そうだよな」

一輝、コーヒーを啜る。

一輝「……でもさ、俺、やっぱり真中に作って欲しくて」

はじめ「なんでそんなに……？」

一輝「なんでって、ずっと三人でつるんでたじゃん。ほんとに友人代表スピーチも頼みたいレベル」

はじめ「うう……それは勘弁……」

一輝「だろ？ だからせめてさあ。いや、せめてつてのもおかしいけど」

一輝、真剣な表情ではじめを見つめる。

一輝「一生の思い出だからさ。お前にも手伝って欲しいんだよ」
はじめ「気持ちには有難いけど……」

一輝「沙織も同じ意見だよ。今日は来れなかったけど。お前の映像、俺も好きだったし」

はじめ「……」

はじめ、逃げるようにコーヒーを啜る。

一輝「……ほんとに？」

はじめ「……え？」

一輝「理由」

はじめ「えっと……」

一輝「いや、疑う訳じゃないんだけど……俺、ずっと気になってさ」

はじめ「……なにを」

一輝「……その、お前って……沙織のこと、好きだったのかなって」

はじめ、目を見開く。

少ししてから、小さく笑う。

はじめ「……二人って、やっぱお似合いかもね」

11.

真中家・はじめの部屋（夜）

はじめ、消灯した自室で真っ暗なPCに向かい、俯いている。

突然、手元の文具を薙ぎ払う。伏せられていた写真立てが落ちる。絵コンテ用紙を破り、丸めて投げる。ベッドに近づいて枕を引っ掴み、呻きながら叩きつけたり投げたりする。

暫くしてから落ち着きを取り戻し、写真立てを拾って見つめる。笑顔で写る三人の写真。

12.

結婚式場・披露宴会場（昼）

一輝と沙織の披露宴が行われている。

司会 「それでは始めに、こちらの映像をご覧ください」

会場が暗転し、参列者が巨大なスクリーンを見る。パンツスーツ姿のはじめも、渋々スクリーンを見る。新郎新婦のプロフィール映像が流れ始める。

音楽が流れる中、色彩変化する光に参列者たちの笑顔が照らされている。一同、ノリ良く盛り上がっている。

はじめだけが複雑そうに見つめているが、少しずつ表情が変化していく。

× × ×

写真立てに入れていた写真がスクリーンに映り、それから新郎新婦だけの後ろ姿の写真に変わる。

「Fin」という文字が映り、暗転する。

参列者たち、大いに盛り上がる。

はじめ、周りから遅れてゆっくりと拍手をし、諦めたように微笑む。

おわり